

【調査レポート】

奨学金は平均 282 万円。500 万円以上のケースも！

「勉強する機会が得られて良かった」の一方、年収には看過できない男女差

カネとホンネ調査研究所は、都市部（※）に居住する 20～39 歳で会社員の男女 912 名を対象に、奨学金についてのアンケート調査を実施しました。

※東京、愛知、大阪、福岡

カネとホンネ調査研究所 (<https://kanetohonne.jp>) は、働く世代の日常的な懐事情や、人生の節目における金勘定を、その本音とともに調査することで実態を解明し、広く世の中に提供することを目的としています。

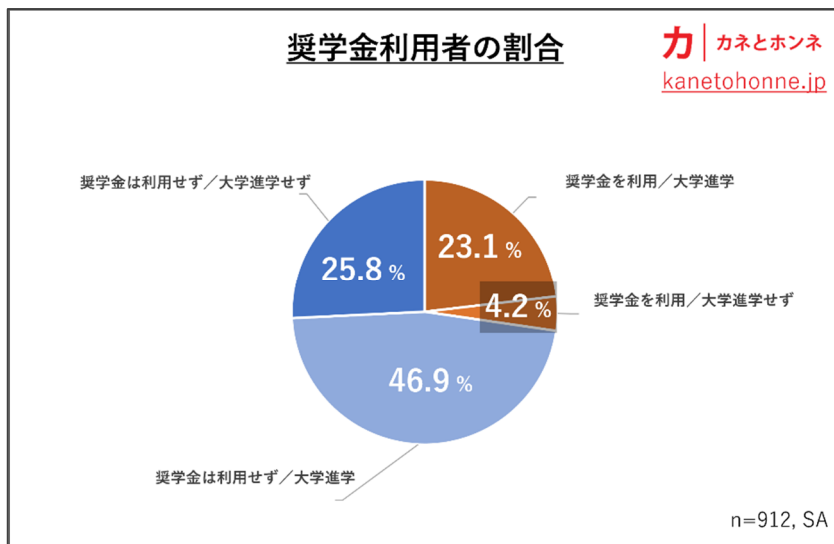
今回の調査によって、サラリーマンの 27.3%、4 人に 1 人が奨学金を利用していることが分かりました。奨学金の額は平均で 282 万円、返済期間は 13.5 年でした。なかには、400 万円以上 (23.2%) や、500 万円以上 (11.2%) など、多額の奨学金を借り入れているケースもみられました。奨学金を利用したことについては、「勉強する機会が得られて良かった」「親に負担をかけずに済んでよかった」とポジティブな意見が多くみられ、高等教育をうける機会が得られる貴重な制度であることが、あらためて明らかとなりました。年収については、20 代から 30 代にかけて 18% のアップがみられました。一方、奨学金の額は変わらないものの、男女の年収に 24% の差があることが分かりました。硬直化した労働慣行をあらためる必要があるのかもしれない。

調査サマリー

1. サラリーマンのうち 27.3%、4 人に 1 人が奨学金を利用
2. 奨学金の額は 282 万円。500 万円以上借り入れるケースも
3. 勉強する機会を得られて良かった！奨学金は貴重な制度
4. 男女で教育コストは同じでも、年収に 24% の差！

1. サラリーマンのうち 27.3%、4人に1人が奨学金を利用

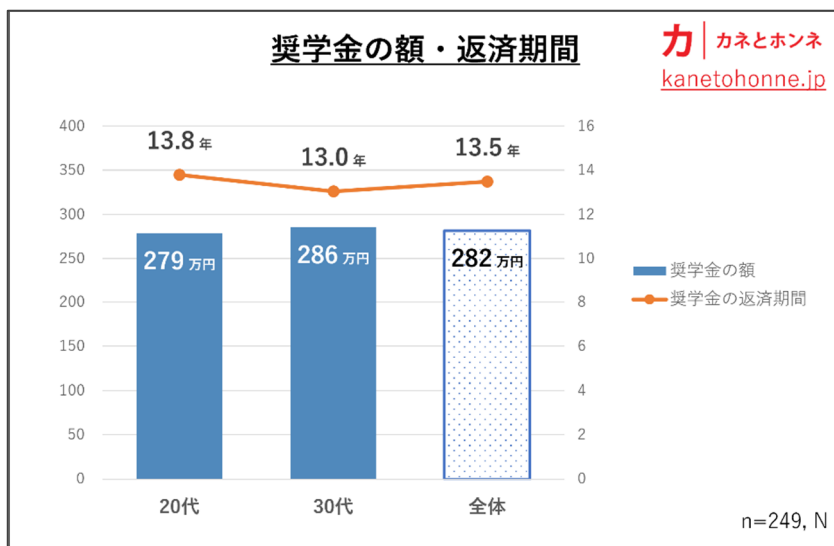
20代から30代のサラリーマンに、奨学金を利用したかどうか聞いたところ、27.3%が奨学金を利用したと回答しました。大学に進学したが奨学金を利用していない層は 46.9%、大学に進学せず、奨学金も利用していない層は 25.8%でした。なお、サラリーマンのうち大学に進学したのは 70.0%、そのうち奨学金を利用した割合（大学進学者のうち奨学金を利用した割合）は 33.0%の計算となります。



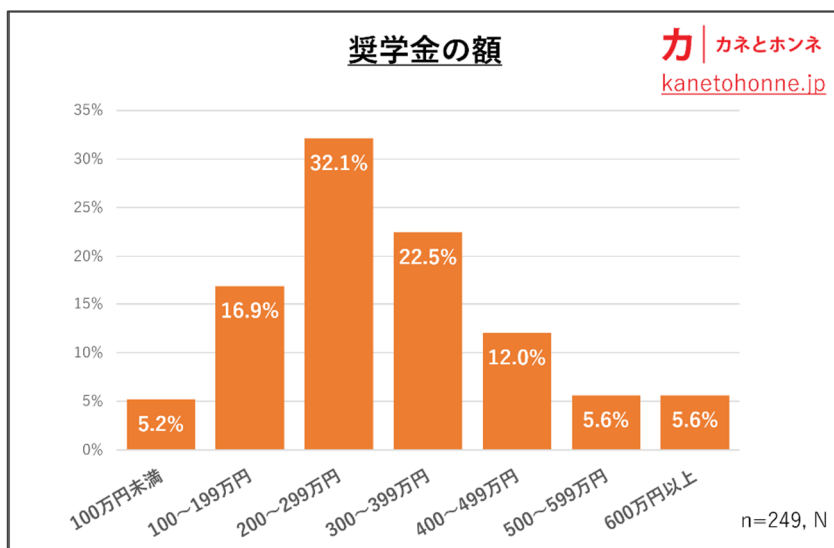
2. 奨学金の額は 282 万円。500 万円以上借り入れるケースも

奨学金の金額と返済期間を聞いたところ、奨学金の額は平均で 282 万円、返済期間は 13.5 年でした。利子を除くと年間の返済額は 20.9 万円、月間だと 1.7 万円の計算となります。産労総合研究所によると、2023 年度の大卒初任給は 21.8 万円。手取りだと 18 万円程度になり、そこから 1.7 万円の支払いをするのは楽ではないかもしれません。

なお、20代と30代で奨学金の借入額や返済期間はほとんど同じで、ここ20年変わっていないことが分かります。



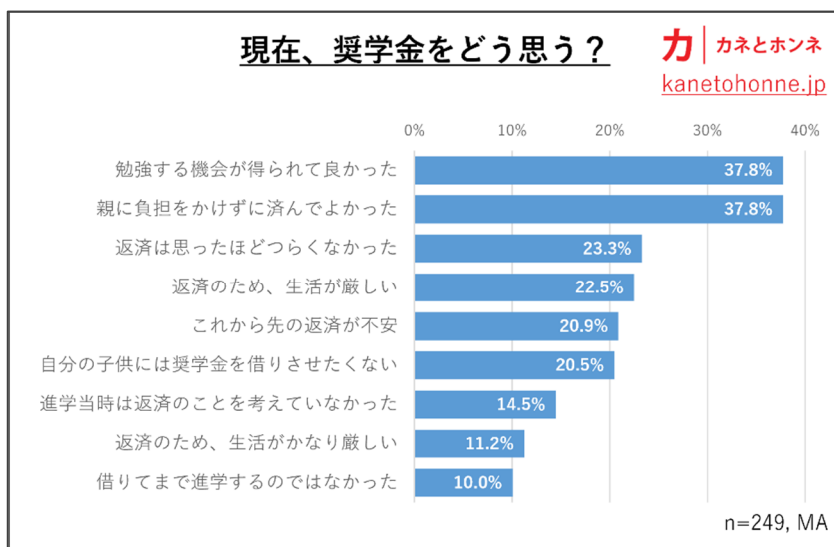
奨学金の額を詳しくみると、200万円台が32.1%でもっとも多くなっています。大学の4年間、毎月5万円程度を借り入れたものと思われます。高校や大学院でも奨学金を利用した場合、当然金額は大きくなります。400万円以上が23.2%、500万円以上でも11.2%となります。



3. 勉強する機会を得られて良かった！奨学金は貴重な制度

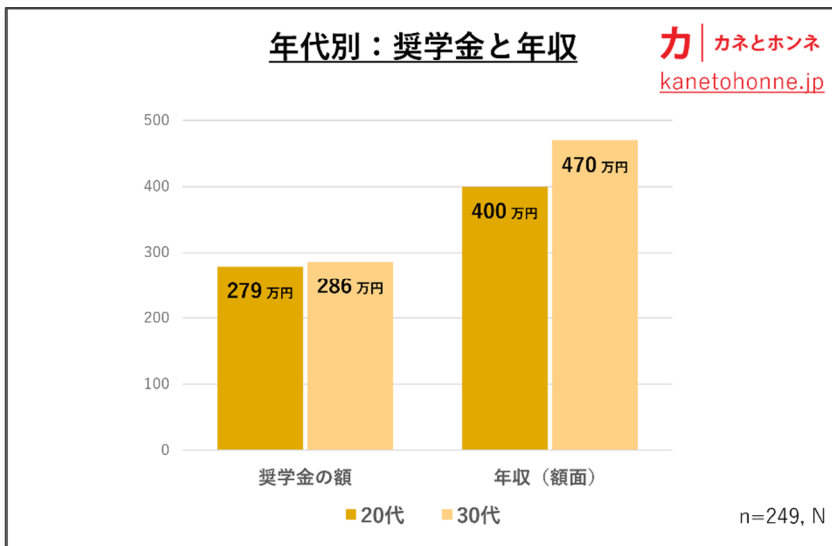
現在、奨学金をどう思っているか聞いたところ、もっとも多い意見は「勉強する機会が得られて良かった」が37.8%、「親に負担をかけずに済んでよかった」も同じく37.8%でした。次いで、「返済は思ったほどつらくなかった」「返済のため、生活が厳しい」「これから先の返済が不安」と続きます。多数意見はポジティブですが、金銭面でややネガティブな意見がみられました。

前項のとおり、社会人生活をスタートする時点で多額の負債を抱えているケースもみられ、少なくない人が不安を抱えている一方、奨学金は勉強する機会を得られる貴重な制度であることが、あらためて明らかとなりました。



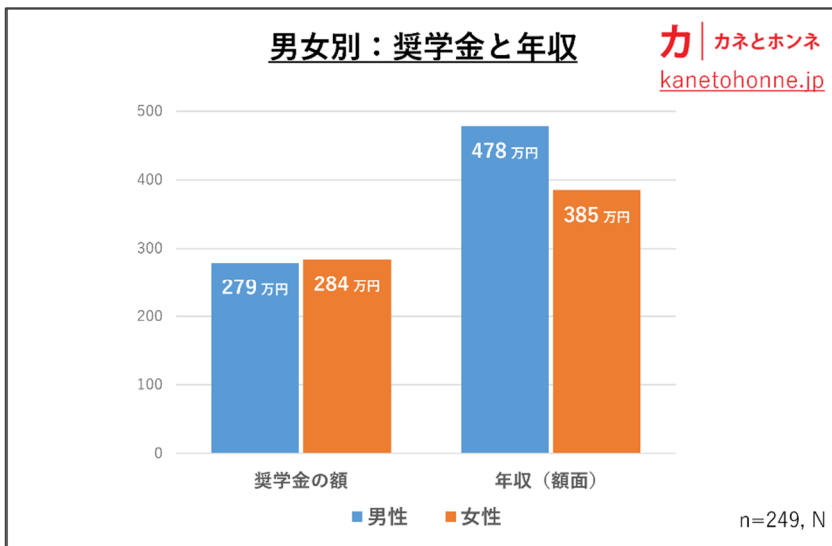
4. 男女で教育コストは同じでも、年収に 24%の差！

次に、奨学金を借りた人にその年収を聞きました。年代別にみた場合、奨学金の額はあまり変わりませんが、年収は 20 代が 400 万円のところ、30 代が 470 万円でした。年齢にともなってキャリアが形成され、その結果、年収があがったのでしょう。10 年のキャリアで年収が 18%あがった計算となります。それよりも、問題は男女差です。



奨学金の額は男性が 279 万円、女性が 284 万円とほとんど変わりません。つまり、学業を修めるにあたり、金銭的に支援が必要な額は男女で変わりがないということです。教育にかかるコストは男女で同じだと言い換えても良いでしょう。しかし、年収は男性が 478 万円であるのに対し、女性は 385 万円に過ぎません。男性の年収は女性より 24%多い計算となります。10 年のキャリアによる年収アップの 18%を超えているのです。多大なコストを払ってきた女性からすると、とても納得いかないでしょう。

少子化の進む日本で、労働生産性をあげるのは至上命題のはずです。硬直化した労働慣行をあらためなければ、その結果が、そのまま我々に返ってくるかもしれません。



【調査概要】

調査名称：奨学金についてのアンケート

調査期間：2023年12月11日

調査対象：都市部（東京、愛知、大阪、福岡）に居住する、20～39歳で会社員の男女

調査数：912名。うち奨学金利用者は249名

調査方法：Webアンケート

■カネとホンネ調査研究所（Kane-Honne Research Institute）

カネとホンネ調査研究所は、働く世代の日常的な懐事情や、人生の節目における金勘定を、その本音とともに調査することで実態を解明し、広く世の中に提供することを目的として設立しました。

これまで明白なようで曖昧だった、お金にまつわる本音を独自調査で解明。客観的なデータにこだわり、公平公正な視点で、令和日本の“カネとホンネ”を紐解いていきます。

URL：<https://kanetohonne.jp>